

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投承認雜誌) 第三五二号
昭和四十六年六月二十五日印刷 昭 六十六年六月一日発行



第三十七卷

第七号

1971

7

七 月 号



目 次

表紙「蓮華文様」松涛達文画

特集 日本人のふる里(おぼん)

魂のふる里を訪ねて〈お盆の墓詣りと寺詣り〉……中 村 康 隆……	(2)
うらぼん……増 木 かずみ……	(6)
鬼手仏心—医師の生活と意見—……	(10)
弁当の味・仏教の味……竹 中 信 常……	(12)
昭和法然上人伝(7)『選択集』の撰述・聖光の入室 ……	(16)
浄土歳時記《ふづきの巻》……若 林 隆 光……	(18)
精神生活の再発見……漆 間 昭 彦……	(20)
諸者の便り 御忌参り……渡 辺 杜 水……	(23)
カンボジアの旅(中)……佐 藤 治 子……	(24)
「道」室津への道……高 橋 良 和……	(29)
浄土宗の古刹をたずねて③ 三河高月院……田 中 祥 雄……	(32)

語和声念



選択とは取捨の義なり

近來、世上やかましい論議をまきおこしている「公害」ということは、結局、「捨て方」の問題である。ヘドロにしろ、煤煙にしろ、ポリ容器にしろ、いかに始末するかが公害を生むか生まぬかにかかっているのである。

「消費は美德なり」なんとという大企業の宣伝文句にまどわされて、消費がいつの間にか「浪費」にスリ変っているのに気がつかず、何でもかんでも捨ててしまえとさらいでいるのが現代の日本人なのである。

「物」を捨てているうちはまだよかった。公害をおこさぬように気をつければいいのだから。しかし、捨てる癖が身にしみこんで、物ばかりでなく、精神や思想、さらには「心」までも一緒に捨てるようになってきたのだから、問題は一層深刻になった。軍国主義はいけない。ファシズムはいけない。封建制はいけない。保守主義はいけない。体制主義はいけない。神話もいけない。修身教育もいけない。宗教教育もいけない。前からあるものは何でもかんでも捨ててしまえである。そして、この頃では近代主義もよくない。デモクラシーも限界に來た。ヒューマニズムも古く

さいといわれるようになってきた。やがては人間がよくない。自分もよくないといって、自己喪失してヒッピーになったり、ついには自殺したりするものさもある。

人間の生活とか思想とかというものは、このように猫の目のように変って、どんどん捨て去ってしまつてよいものなのだろうか。若い女性が流行に敏感なのはよいかもしれぬが、ヒゲのはえた大の男までがやたらに化粧品を買い込んだり、メンズ・ファッションに浮身をやつしているのは、どうみても頂けない。物を捨てるには「捨て方」を考えねばならぬ。捨てるということは、より良いものを生み出すためにこそなされるべきことなのである。より良いものを選びとるために捨てるのでなければならぬ。このことをすでに八百年の昔、実行した人がいる。それは法然上人である。凡人を極楽に救いとるために、弥陀の本願念仏を選び取られた。そのために、八万四千の仏教の法門の大部分を惜し気もなしに捨て去られたのである。これが本当の「捨て方」なのである。

日本人のふる里（おぼん）

魂のふる里を訪ねて

— お盆の墓詣りと寺詣り —



中村 康隆

（大正大学教授）

盆なりとむしりけるかな塚の草（句空）

お盆がくると第一にしなければならなかったのがお墓の草むしりであった。町方では今では殆んどがこの作業を寺方におしつけていて、お盆行事の第一が墓地の草取りであり、七日盆位までになるべくとりおえるのであるが、草取りがすみ、七夕がすむと、じきに磨き盆といって仏具類をみがき、また灯籠などの紙のはりかえもやった。私の寺では、それは十一日の行事で、その日には墓地に立てる盆灯籠を寺のだけでなく檀家より預っているものを全部はりかえ、それに光明

遍照とか先祖代々などの文字を住職が書き、それを翌夕墓地に立てるのが私たち小僧の役目であった。子供の頃とてそれも楽しい盆行事の一コマとして喜んでやったものである。

しかし墓地の草取りも本来はみなそれぞれの家で負担すべきことなのであった。遠い先祖に対しても子孫としてなすべき大切な行事であったが、近しい肉親を亡くした人にとってそれは悲しくもまた懐しい想いにくれるひとときなのであった。

魂棚の奥なつかしや親の顔（去来）

の句にもうかがえる肉親の情愛は塚の草をむしる一手一手にも熱くこみあげてくる筈である。いまでも、盆がくると七日か十一日頃に当主がわざわざ墓地の清掃、草取り、垣根の樹木の枝はらいなどに来る古風を伝えている家もある。

それが、本来の日本人の姿なのである。

生活がいそがしくなつて墓地の草むしりはお寺さんの当然の仕事として何とも感じない現代人の身勝手さは、むしろ世の末の毒害といつてよいのである。

むかしは、盆の行事は、正月同様、一カ月にわたる大切な祭り月の行事であつたから、墓地の草むしりも、むしろ朔日の仕事だつたであらう。

七月の一日が地獄の釜の蓋のあく日だとする伝承はよく知られており、この日をカマブツイタチなどと関東では呼んでいるが、丹後などでトンボ朔日というのも、広く盆の精霊がそれに乗ってくるとも、精霊トンボはお精霊さまが姿をかえてこの世にやってくるともいつているところがあるからであるが、いずれにしても一日がお盆の初まりだとする考えは広い。

今では殆んど新仏のある家で立てる高灯籠も、本来は広く朔日から晦日まで家々に建てたらしい。土佐では旧六月三十

日の夜をトボンゾメ、七月晦日をトボンアゲといっている。松明を焚くのも同じで、今では新仏のある家が朔日から焚くというところが多いが、東北などではどこの家でも七月初めから大抵七月一杯焚き続けたものとされるように、本来は家々の行事であつた筈である。

盆の墓掃除も、今は多くは七月七日の行事で、上総の長生郡ではこれを墓薙ぎといい、下野芳賀郡では墓の草薙ぎといっている。中には七夕を迎える意識からかと考えられるが、墓はり（墓の草払い）（佐渡西三川）、墓所ざらえ（志州安乗）のように六日の行事とするところもあり、肥後の南関の墓ざらえのように十一、二日に行うところもあるが、信州南佐久の御墓刈りや常陸行方郡の墓薙ぎが七月一日の行事であつたように、本来は七月の盆祭りの最初の仕事だったのである。

その風はいわゆる盆路作りの風に残されていたことである。常陸の行方郡の諸村では一日に墓薙ぎをするため、別に七月十日に路薙ぎといつて仏さまを迎える準備として道の草を刈るそうであるが、これは後世の変化であつて、しかも路薙ぎの本意が墓薙ぎに存したことを物語っているのではないだろうか。盆路作りは、また精霊路とも呼ぶように、精霊の降臨しやすいように山から里へ降る路を刈払うもので、今はや

はり七月七日に行うところが多いが、三河の山村その他にツイタチミチの言葉のあるように朔日の盆行事だったと考えられる。それが日向の真幸地方のようにおそくも七日までにはしなければというようになり、ついには七夕の日の行事とも転化したのであろう。

こうした変化は一日からのタイムツツ焚きが新盆の家の行事と見られるようになったのと軌を一にするものである。ほかの一般の家々が行わなくなったあとも、新精霊のある家だけは昔ながらの一日から、マツを焚き、また高灯籠も出したのであった。

こうした変化は、要するに、生活の煩雑化に伴い、生活の時間にくいこむ率の多い行事から次第に簡素化されていく傾向が強いことを物語っている。

お盆のお墓まいりもまたその伝をまぬかれなかったのである。

昔は、十三日になると、早くから家の前を掃き清め、うち水をして、松明を焚き、家中うち連れて墓参りをして、御精霊さま御先祖さまをお迎えして、み魂まつりをしたものであった。

心にて顔に向うや魂祭り（鬼貫）

なつかしい顔、いとしい顔、恋しい顔、いつまでもまざまざとわが心には在りし日のごとくに語らいかけ得ることであらう。あらためて魂棚に位牌を並べて向うと、まさに如在（おわすがごとし）の感深いものがある。

悲しさや麻木の箸もおとななみ（惟然）

可愛い我が子への手向けは殊に悲痛な感懷を催すことであらう。

こうして日に日にくりかえしマツをたき墓詣りをし魂祭りをして、十六日になって送り火を焚き魂送りの諸行事をいとなんだことである。これが盆三カ日の祭りであり、次いで廿四日の地藏盆がある。地方によると地藏盆をしまい盆、送り盆、ウラ盆などと呼ぶところのあるのは、既に盆が一カ月の祭事であることが忘れられて、盆月の祭りの終了かのごとく思いたがえてしまったことを示しているのである。

伊予の大三島では二十四日盆の日が燈籠破りの日で、新盆の家に親類がまた集つて燈籠を解き切紙細工を子どもたちに分けてやる。永らくの盆も相すんでご安心でございます、と挨拶するそうである。夕刻には多くの地方で十六日に行う燈籠流しの施餓鬼をするということである。ところが、同じ伊予でも喜多郡などでは七月晦日をトボシアゲと呼び、近頃で

は新盆の家に限って九一月間、旗と燈籠とを家の外に立てて置いて、晦日にこれを墓所に持って行ってお盆の行事を終るということである。淡路の三原郡でも七月晦日が燈籠おろしの日で、親戚が集って真言念仏を唱えるという。

私の幼時の記憶では魂迎えの墓詣りはまづ当主の役目で、家中の者は家で魂祭りをおえてから、打ちそろってまた寺詣りをしたようである。お盆の三カ日はわたしなど小僧は位牌堂の蠟燭や線香の番人で、夜になると本堂と位牌堂に詰めさせられたものであった。広い本堂の仏前で子どもたちはハシャギまわり、角力などといったものである。

したがって、どこの家でも三カ日の間は、迎え火を焚き墓詣りをして精霊を迎え霊供をして、また寺の位牌堂にお詣りするの、本来の形であったようである。寺詣りは、したがって、魂祭りをした諸精霊を再び御本尊アミダ如来のもとにお連れしてその庇護をお願いした形であると想われるのである。

ところが、こんにちでは、三カ日の間、毎夜墓詣り寺詣りをする家は殆んど見られなくなってしまった。たまたま十三日に墓参できなかった人とか家とかが十四日または十五日にお詣りするのが、町方の風と変わってしまったかのである。

これについて、わたくしは卒直に疑問を口にした。するとこれに対して返って来た答えは次のようであった。「それは、おしようさん、当然ですよ。もう十三日に銘々の家へ御先祖さんをお迎えしているんですから、十四日や十五日にお詣りしても意味がないんじゃないか、というのが、若い者たちの考えなんですよ。今の若い者は合理的な考え方をするから、昔の人が習慣だからといっておこなってきたことも、不合理性があれば改めて憚らない、というのが、その人の意見であった。

宗教が、時代と共に装いをかえ、新しい形態へと発展するには、合理主義の精神の発揚が大いに与っている、というのが、マックスウェーバーなどの考えであるが、この例など正にその一例といえるであろうか。

しかし、実はそれは解釈の間違いであり、無理解からの変化であることは、前の記述から見ても明らかである。自分たちの御都合主義をカムフラージュする似而非合理主義であり、似而非論理でしかない。そこには戦後の生活の多忙化と、実用主義の生活態度への偏まりという裏付けが見られるのである。それに人々をひきつける大衆娯楽産業の発展もある。古くさい価値体系の崩壊感も根強い。

そこでもっともらしい理屈で自分を満足させて、もっと切実な現実的享楽や欲望追求へと生活時間を割りふってしまうことになる。

これにくらべると、地方ではまだ多分に古い慣習を捨てきれない感じ方が残っている。そこで千葉県などでは、盆中の墓参りについて、十四、十五のそれは「留守見舞」だと説明しているということがある。これも、もう三カ日の墓詣り寺詣りの本当の意味がわからなくなつてのゴジツケであることには変りがない。けれども、何とか納得のいく線で慣習を守ろうとする姿勢は見られる。しかしそれも変貌する社会状況に押し流される日も近いことであらう。

きました きました たのしいおぼん

迎え火たいて ののさまを

みんなで おむかえいたしましょう

ねんに いちどの たままつり

外からは、子どもたちの、たのしい歌声が、きこえてきます。

わたくしたちは、いまの日本人が、いま一度、日本人古来の魂のふるさとを忘れないで伝統的文化の精髓を正しく理解して、近代の物質文明の害毒に押し流されない、真摯な生活態度を再建するよう、努めなければならぬであらうし、また、それと共に、生活状況の変化に伴って、新しい方式で盆三カ日の寺詣でを復活させる方途を考える必要もある。盆踊りなどで、若者たちが祖霊と共に過す一時を喜んで集まるようになるのもよいのではないだろうか。

(青々)

(白雄)

もの言わぬ父に逢うなり墓参り
迎え火や父の面影母の顔

う ら ぼ ん

増 木 か ず み

浄土宗寺庭婦人会副会長
佐賀教区寺庭婦人会会長
月 影 幼 稚 園 長

「お精霊様が、早くこられるように、ぼくは、きゅうりのヒコーキをつくったよ」

「ぼくはなすのハイヤーをつくったよ」

「ぼくはロケットをつくらうかなあ……」

などと語りあいながら、ご先祖さまを迎えるために、子どもたちは手に手に野菜や果物を持ってきて、なすの牛や、きゅうりの馬よりも、一段とスピードの早い飛行機や自動車・ロケットづくりに熱中します。

お仏壇には、母親の心づくしの精進料理、はすの花に、みあかし・お香、それに子供達の作品がつぎつぎに並べられていきます。

今は亡きご先祖様が、成長した孫の様子をみるために、帰ってこられるから、ご先祖様によるこんでいただこうと、一生けんめいになっている、なんと美しい家庭の姿でしょう。よくいわれている「家つき、カーつき、ババぬき」でなく、まさに「家つき、カーつき・ご先祖つき」と申すべきでしょう。

ハイ盆はナー ホイサー

盆はうれしや 別れた人の

アラセーヨホホイ

晴れてこの世にハイ逢いにくる

ハイ雲のナー ホイサー

雲の間から うらやましげに

アラセーヨホホイ

おどりみているハイお月さま

お盆を迎える度に、大分県久住高原の宿で、木の間がぐれにきいた盆踊歌がなつかしく思い出されますが、九州のあちこちの町や村では、いくらか下火になったとはいえ、今も尚、色々な趣向で盆踊りが催されています。最近では共同納骨堂を開んでの盆踊りも盛んになってきました。

関東のお盆は七月、関西や九州は八月だときいています。

お盆は日本国民が先祖を敬い尊ぶ孝心にもとずく、各家ごと先祖のみたままつりであります。

神田寺の友松先生は『お盆の思想は本来、ただ亡き両親とか、顔も知らぬ先祖の霊を慰めるというよりは、もつと实际的に「現在の父母」とあるから、父の日、母の日であり、さらに「七世の父母」の日でもある。もつとさかのぼってゆけばわが祖先もひとの祖先も互いに共同に入り結んで、それこそ有縁無縁法界平等利益となり、ひいては人類の祖先一般への感謝ということになってくる。いってみればお盆というも

のは人類の祖先祭であり、人間の文化祭でもある。

してみると、お互いのこの生命というものが一体どこから由来したのかという生命の出生、誕生を考え、且つ祝うのがお盆であり、やがてまた、その大切なお互いの生命を祖先に對して大切にすること、きずつけ合ふこと、殺し合ふこととお盆の精神でもある。だから、お盆というものはつきつめてみれば、この地上に平和をいのる「平和の祝典」でさえあると思う。またそういう風にしむけることが、もっとも正しいお盆の精神ではあるまいか。お盆はただうしろ向きの行事ではない。變通事故によつて一人の子供でもけがをさせぬように、お互いの生命を尊重してゆく運動と結びつきうるのである。山のぼりの遭難者を一人でもへらして行くことに結びついて行けるのではあるまいか。お盆はたしかに生命の祝典である。生命尊重の祝典である。今日生きていることをわが祖先に、人類の祖先にさらに一切に感謝する日である。感謝するとはただ口先でそういつていることではない。この生命を無駄にせぬこと、無意味な一生を送らないことである。一切に生かされているお互いであることに気づいたら、何かにお役に立つように御恩返しをすべきお互いの人生ではあるまいか。

「人生はかりている」お盆とはこの自覺に立つて少しでもそのかりをおかえしすることである。お盆は報恩行と結びついて始めて仏教本来の行事となつてくる。平素忘れがちな恩顧をうけた先輩の家を訪問するのもいい、忙しさにかまけて墓參を怠つていたのを、このお盆を好機として花香をたむけるのもいい、平素、世間から余り顧みられていない身体障害者の施設なり、養老院なり、母子ホームなりに、志をはこぶのいい、やることはいくらでもある。このお盆を仏縁として仏道修業の真似事をやつてみるのいいではないか。仏書をよくむのいい、寺院に法話をきくのいい、參禪するのいい、授戒会の仲間入りするのもいい、とにかく、このお盆は人間として生れてきた光榮をひそかに気づく祝典である以上、生命の祝典ともし、文化祭ともしさらに生命尊重の上で平和の祝典ともししてほしいと思つている』とおっしゃっています。

お盆は生命の祝典!! 平和の祝典!!

何とすばらしいお言葉でしょう。今までお盆についての法話をうかがつたり、いろいろの仏書を拝読しましたが、友松先生のこのお説には、特に深い感銘と共感を覚え、何回も何回も繰返し拝読致しております。お説の通りお盆は感謝と生命

尊重と平和の心を養うところに、真の意義があると思います。

「親子の断絶」「御先祖との断絶」等と、意見が交わされるような悩み多き現代に、私達はお盆を迎えて、現世だけでなく、もっと深く、過去、未来との断絶のないように考えなければならぬと思います。

精霊棚をまつり、墓前に香華をささげ、ご先祖様のみたまに供養していただき、家族揃って心から合掌念仏致しますと、ご先祖様のおかげ、いのちの大切さ、ありがたさが、ひしひしと身に沁みてまいります。迎え火、送り火、精霊流し、盆踊り等々、このお盆のすべての行事が、日本人の美しい、うるわしい夏の風物詩であり、心のふるさとであるといえましょう。また私達に日常生活の反省と感謝の念を培うのに、最も親しみ易く、行い易い行事であるともいえると思います。

昔、お客様を迎えるのにかがり火をたいように、あかあかと心の迎え火、送り火をたいて、みたまの送迎を致しましょう。そしてよい子孫であることをよく見ていただきましょう。それが何よりの感恩報謝となるものと思います。

そのためには、まず私達自身が、いのちを大切にし、人に

与えるよろこびを持ち、自らを反省し、忍んで悔いなく、不平なく、つとめはげみ、心に静かなおちつきをもって、慈愛にみちたきまりよい日常生活を送り、子供達のよいお手本になることが必要であると思います。「子どもの頃、生活を通して身についたことは、その後の生活と、ものの考え方がどうであらうと、心の底にしみこんで、はなれない」と言われています。

お盆は、家庭で、特に次の時代を背負う子供の心を、美しく、情緒ゆたかな、信仰深い人に育てあげるのによい機会だと思えます。

きよらかなお盆の宵、家族一同心をひとつにして、感恩報謝の誠をつくし、日本古来の美風を幼い心にしつかりと植えていきたいものと念じています。

合掌

家は皆杖に白髪の墓参り

(芭蕉)

かたみ子や母が来るとて手をたたく

(一茶)



鬼 手 佛 心

——医師の生活と意見——

今日の生活はすべてが機械的に取りしきられ、人と人との触れあいが、いつしか置き去られた感はいない。江戸時代の人情話にみられるような、庶民の間の心あたたまる触れあい、そうした情緒あふれる気持ちの通い合いは、今日もうないのであろうか。そこで今回の特集に際し、医学を通して人々と共に歩まれた石井先生に登場願ひ、その科学的な専門分野と日頃の信仰生活をいかに両立させているか、また今日の生活様式をどのように考へていくか、などについて素直なところをお聞かせいただいた。

——代々お医者さんとのことですが——

私で数えれば十二代になりますが、九州黒田藩の藩医を代々勤めておりました。藩医といえは聞えがよく高禄を食んでいたようにみえるでしょうが、現実には微禄のようでした。といいますのは、高禄を与えればいざという時に役に立たないという訳で、町中に開業させ、絶えず庶民に接触させ、腕のにぶりをさげたのです。代々仲琢という医名がついておりましたが、いざ病氣となると仲琢を呼べということ、屋敷におもむいたのです。所謂働らかぬ者喰うべからずというところでしようね。

——そうした庶民生活の中の治療です

と、自然人情味あふれる生活であったのでしようね——

くわしくは分りませんが、先年亡くなりました父の生活を思い出しますと、何か昔が偲ばれるものがありました。庶民の中に置いて微禄を与えろという政策ですから、自然情緒ある生活となり、祭りとかしきたりとか庶民生活に染っていたことは事実だと思います。

——丁度お盆となりますが、何かそうした思い出はございますか——

藩医の頃は内科医、祖父は眼科医でしたが、父が耳鼻科でしたので、私はそのあとを継ぎました。そして父が横浜に開業しました

ので、所謂町医者のため、具体的には田舎があるようでないものですから、暑くなり汗ばんでまいりますと、ああお盆の頃になったのだなあという、実感めいたものは感じますが、具体的には幼い頃の思い出程度ですね。

——その思い出と申しますと——

どの地方でもそうでしょうが、お盆になりますと、夕方未だ暑さの残る道ばたでおがらを焚き、家の中には祭壇を設け、藩医だった先祖の遺影を並べ、伝わっているしきたりに則って生醬油の素揚げや干菓子をお供え、お待ち

の明りという訳で火をともし、香をたく、そうした薄明りの中の紫色の煙りの中にご先祖さまを迎え、盆中共に過し、その間親戚の人々が集まり供養し、送り火と共に近くの川へ供えたものを流したのです。これに関連して、丁度コッホなどによって検疫法がやかましくなった頃、父はそうしたものを川へ流すのは世のために良くないことだという医者

——そうした幼い頃の思い出が、今日の先生の生活の中に残っておりますか——

かたちこそ違いますが、大いに残っております。他のお医者さんもあるそうですが、いざ手術という時、メスを両手に取り頭の上にあげ、静かに眼を閉じます。すると何かが浮んでまいります。長谷川伸さんの「腋の母」ではありませんが、それが母であつたり、太陽や空であつたり、いろいろと浮んでまいります。その時仏さまが浮べばしめたものと感じます。ところが仲々浮ばないのが現状ですが、そうした気持ちで手術に当ります。こうした内面的なところで宗教と接触しているといえますね。

——現代の世相をご覧になって、なにかお感じになったことは——

現代は文化が進み、生活状態が安定しております、欲しいものは、ある程度、なんでも手に入る事ができる、非常によき時代だとも思います。しかし、なにか、アンバランスの時代ではないでしょうか。というのは、私は

ちば、知識としては、色々吸収して、物事を知っていますが、体験的に、あるいは情緒的

にうけとることが、できなくなっているのではないのでしょうか。情緒が不安定の時代ともいえましようね。その情緒を育てたのは、まえにもいったように、日本の昔より民衆に伝えられている、お祭りの行事や、お盆やお彼岸の行事ではないでしょうか。

父が亡くなりましたとき、一応覚悟はしていましたが、やはり昏乱してしまいました。生理的、医学的な死というものは、よくわかつていくわけですが、いいかえれば理窟ではわかつていくつもりでも、いざとなると心が落着かぬものです。そんなとき、ご住職の読経をいただき、仏教のお話を聞かせてもらっているうちに、次第に心が落着いてきました。お寺様がたは、もっと積極的にお説法をして下さる必要があります。

この「鬼手仏心」は父が書いたものですが、メスを握る手は非情であっても、腋にほとけをえがき、慈悲の心で患者に接するよう心がけています。

(語り手 横浜、石井耳鼻科医院長

石井英彦氏)



味の弁当 味の仏教

毎年七月になると思い出すことがある。それは、わたしが生れ、そして幼年時代をすごした浅草山谷にあった寺の「せがき」のことである。

せがきの前夜になると、近所の組寺の和尚さんたちがやって来て、台所で、芋の皮をむいたり、茄子にきざみ目をつけたり、きうりをきざんだりする。女手は一切加わらず、ふだんは木魚を叩いたり、鐘を鳴らしたりする武骨な手を器用に動かして、野菜の下ごしらえをするのである。

そして、翌朝、せがきの当日には、暗いうちからやって来て、御飯を焚いたり、芋を煮たり、香の物をつくったり、い

(大正大学教授)

常 信 中 竹



そがし気に働くのである。和尚さんたちにも得手不得手があるとみえて、御飯を焚く人は御飯焚き専門、味つけする和尚さんはダシを作ったり、匙かげんを見たりしている。まだ小学校にあがらぬ前の幼いわたしは、こうした風景を台所の片すみから眺めて、坊さんというものは何でもしなければならぬものかなあと、しみじみ感心したものである。

やがて、こうして作られた料理が箱弁当につめられて、いくつもいくつも重ねられると、子供ごろに、早く昼になって、あのお弁当をたべてみたいものだ、と、ひそかに思うのである。

それから何十年。いまでも、壇家の人の中には、

「お寺でたべたお弁当の味が忘れられない」

という人がある。別に大した御馳走ではないのだが、寺のせがきに参って、大勢の人々と一緒にたべる弁当には格別の味が感じられたのであろう。

その頃の山谷は、西に吉原の大門をひかえ、北には汨橋なだはしから千住の小塚原があり、南は山谷堀の流れを隔てて浅草の聖天様。東には隅田川に至る間に町家がならんでいた。その頃ではすでに、山谷堀を隅田川から舟でさかのぼり、日本堤からカゴで吉原にくりこむという風景はみられなくなっていたが、それでも、堀に沿って今戸一帯には、黒塀越しに柳の植った商家の寮がところどころにあつて、そばを通ると、昼間でも三味線の爪弾きの音が聞えたものであつた。

むしろこもろ言問橋はまだ架けられておらず、竹やの渡しを舟で行くか、ずっと北にまわって白鬚橋を渡らなければ、向島へは行けなかった。その白鬚橋も木橋で、橋のたもには番小屋があつて、人は二銭、牛車は五銭の料金をとっていた。高速道路の料金所をみると、いまでもわたしは白鬚橋の番小屋を思い出すのである。その二銭の料金がおしさに、牛車の陰にかくれて番小屋の前をとおるぬけるのが子供ごろには大

へんなスリルであつた。

夏になると千住のガスタンクの下にある広っぱにトンボとりに行く。その頃のガスタンクは原っぱの真中にムキ出しになつていて、ガスが一杯つまっているときは遠くから見えるが、ガスがぬけてへつてくると段々低くなるのがよく分つたものである。

山谷も変つた。わたしの知るかぎりでも、山谷界限は三度の大火にあつてゐる。明治の末の吉原の大火（これはわたしの生れる前だが）大正十二年の関東の大震災、そして昭和二十年の大空襲である。わたしは関東大震災の後まで山谷にいたが、今日、所用があつて、たまに行つてみても、おどろくほどの変りようである。それまでは夏になるときまつて水が出て、時には畳の上になで水がくる年もあつて、わたしの寺の本堂の縁の下には木舟がしまつてあつたほどである。荒川放水路ができたおかげで、大水も出なくなつたが、そのかわり、あたりの風情は一変してしまつた。悪名高い山谷のドヤ街などは関東の震災のちにできたものだが、それでもその頃は今日のような風紀の悪い、險悪なものではなかつた。

今日では道路もよくなり、ビルも建ち、大変便利になつたようだが、その反面、牧歌的で、しかもまた一面にイキナ江

戸情緒をたたえていたものがすべてとり払われて、東京のどこにもあるような、カサカサの、ヒカラビタ町並みになってしまった。

町の様子が変わったばかりでなく、人の心も変わったのではないだろうか。そして何よりも変わったのは、近所の和尚さんたちが丹精こめてつくった、せがきの弁当の味ではないだろうか。時代はインスタントの時代となって、前の晩から大勢集って、ワイワイいいながら煮炊きするなんてことは、思いも及ばぬこととなった。わたしの知っているお寺では、店が売っているオイナリサンやノリマキの折詰めをそのまま並べている。それはまだいい方で、お斎食を出すのは面どうだからといって、せがきを午後にして半日ですましてしまっているお寺もある。それぞれ事情もあり、やむを得ぬことだとは思いますが、それでは少しワリ切りすぎではないだろうか。その筆法でいうなら、そんなに面どうならお寺をやめてしまえばいいだろう。

世の中には、ワリ切っていることとよくないこととがある。卑近な例でいうと、「おむすび」である。子供の頃、遠足でたべたおむすびの味と、このころはやりのおむすび屋のおむすびの味と、なんとちがうことだろう。ちがうはずであ

る。一方は、母が暗いうちから起きて御飯を炊いて、釜からおろしたての熱い御飯を、手をまっ赤にしてフウフウいいながら、心をこめて握ってくれたのである。冷たくなりかけた飯を型にはめて、ボンボンと作り出すおむすび屋のとは雲泥の差である。味のちがいは心のちがいである。ある人がいつていた。

「遠足でたべたむすびはおふくろの味がする」

このことは万事に通ずる。姿や形にかわりはないが、その中にこめられた心がちがう。一方には「ねがい」がある。かわいいわが子においしくたべてもらいたいという「ねがい」がこめられているのといないのでは味のちがうのは当然である。

おせがきのお弁当も同じである。電話一本で注文して、この誰が作ったかもわからぬものを、ボンボンと卓の上に並べて、さあおあがりなさいというのと、前の晩から一所懸命になって下ごしらえし、早朝から煮炊きして、それこそ、まだ湯気の立つようなお弁当を、心をこめて供養するのとでは、味のちがうのは当然である。

そうしてたべてもらおうお弁当を、壇家の人の中には、「これはみんなお寺さんでおつくりになったのですか。：

「どうりでおいしいと思った」と、たとえお世辭にしろ聞いて下される人もある。やはり、どこかちがうのである。それが心にピンと通するのである。

このごろの若い者は信仰心がない。御先祖を大切にしない。お寺まいりをしない。こうした声を聞くことがしばしばある。わたしはこうした声を聞くに思うのである。いまの若い人たちがお寺に来なくなったのは、弁当の味を知らぬからである。逆に、現在、お寺まいりをし、菩提寺を支えている年層の人びとは、かつて子供の時分、お寺でたべた弁当の味を覚えている人びとなのである。それを、弁当を作るのが面どうだからといって、製品を買って来たり、斎食をやめてしまったりするということは、弁当の味、お寺の味、いいかえるならば「仏教の味」を味あわせてやらぬことになる。これでは、若いものがだんだん離れてゆくのは当然である。自分で自分の首をしめているようなものである。弁当にこだわるようだが、わたしはそれでいいと思うのである。仏教と

か念仏とかというものは真正面切って説教するものではない。そんなことは、えらい先生の書いた仏教の本を見ればわかることなのである。出来上った製品をうんぬんするのではない。出来上がるまで、つくり上げるまで大切なのである。その中に、まごころがこもっているか、いないかが問題なのである。

仏教とか念仏とかというものは「知る」ものではなく「味あう」ものなのである。じつとかみしめてみるものなのである。じーんと心の底にまで浸みとおらねば、それは本当の仏教でも念仏でもないのである。

わたしの寺では、家内がささやかではあるが、依然として、昔どおりに芋を煮、隠元豆をゆで、しいただけ味をつけて弁当を作っている。

わたしはそれを、わたしが本堂でよむお経より尊いものだと思ってみているのである。

日本人のふる里（おぼん）

特集



『選択集』の撰述 (13)

建久九年（一一九八）正月早々、法然上人は風邪をめされた。いつもの風邪と思つて恒例の別時を勤められたのが原因で大病になり、三月ごろは危篤状態になった。周囲の人々は心配を続けたが、幸い四月の中ごろから快方に向つた。余命をさとした上人は、遺言状を書いて弟子の進む道を示されたが、檀越の九条兼実をはじめ弟子達は浄土宗の要義を残して下さるよう上人に懇請した。それに答へられたのが『選択集』である。この書は浄土宗の独立宣言を物語るものであり、当時の仏教界に大きな影響を与えた。



聖 光 の 入 室 (14)

建久年間に入ると、法然上人には沢山の弟子ができた。その中で上人と生活をともにしていたのは、信空・感西・証空・円親・長尊・感聖・良清の七人であった。浄土宗二祖の聖光は天台宗の僧で、筑後油山の学頭をしていたが、建久八年五月に用事で上洛し、噂い高い上人を吉水の庵室にたずねて弟子となった。すっかり上人に帰依した聖光は一度帰って後始末をし、再度上洛して『選択集』を授けられ、熱心に学問を続けた。その後聖光は筑後に帰って念仏の布教に専心し、今日ある浄土宗の基礎をつくった。

松溝 達文画
玉山 成元文

ふ づ ぎ の 巻

お盆には亡くなった人が帰って来るそうですが、そんなことがあのでしょうか。

柳の芽が一日に驚くほどのび、夾竹桃のつぼみと枇杷の実の色づきがせりあうように日一日と濃くなってゆく。そして睡蓮の花と一しょにお盆がくる。

日本の夏は暑いとか、過しにくいとかいう。そのせいか、お盆につきもののように行なわれて来たお施餓鬼の行事を五、六月に行なう寺がだんだんふえているが、何か考えさせられるものがあって、大賛成とはまいりかねる。ともあれ、日本が地球上で最も気候に恵まれた風土であることは、僅かでも外国に出たことのある人には異存のないところであらう。暗い北欧の国々や、空気が澄んでいるといってもろくに草木もはえないエーゲ海の島々の気候から考えれば、春の次



若 林 隆 光

(二松学舎大学講師
浅草西光院住職)

に夏が、夏の次に秋が、確実にやってくる日本の気候は人間にとって最適なのではないだろうか。クーラーで能率をあげるのも結構だが、何の努力も要しないところでは悟りが開けないとお釈迦さまもいっておられるようである。温湿度調整の博物館の「はこ入りほとけ」たちが、一歩も外へ出られなくなりつつあるのは周知の事実、人間が水の中のくらげのようになつて、外へ出されるとぐにやぐにやにならないことを祈ろう。

さてお盆には亡き人々が帰ってこられるとは本当かしらとは誰しも抱く疑問であらう。割り切つてそれは譬さといつてしまえば解決しようでもあるが、それでは何か物足りない。仏教本来の教説に背くといつてみても理窟ではない何かが残る。また一たん極楽に往生して自在の生命を獲得したものならば、何もお盆でなくても、一年中自由にわが家を見舞つて

くれることが出来るであらう。

しかしいろいろ言ってみても、亡き人々がかえって来て下さるなら、山々が青々と茂る夏でなくてはなるまい。北風の吹きすさぶ、吹雪の冬山から帰ってこられたのでは、暖いわが家から再び山へお帰しする気がしないであらう。またお盆のわずか三、四日にだけ帰って来て下さるというのもよいではないか。どんなに恋い焦れている人でも、四六時中眼の前に居られたのでは、それこそ鼻につくというものである。恋しい人がたまに来てくれるから、うれしく有難いのが、人間の情であり、我侭である。

我侭といえは、五月号の「浄土」を拝見したら、聖徳太子が「私を以て貴しとす」とおっしゃったと拙文にある。まさか聖徳太子がそんなことを仰せになる筈はないから、原稿の下手な文字に災いされた誤植であることはいうまでもないが、「和を以て貴しとす」の反対が「私を以て貴しとす」だと気付かせて下さったのは、誤植様々であった。こんな誤植は頂けないなと思った我侭は私を以て貴しとしていたからに他ならず、世の中は私の方を貴ぶ方ばかりだから和がこないのだともいえよう。

お盆は亡くなった方のお精霊さまが帰ってくるという。だ

か誰も見たものはなし、お供えのお膳に箸を差向いでつけたところで、ご馳走は少しもへりはしない。だから帰ってこないのかもしれない。だが昔の人々が何代も代を重ねて帰って来ると教えて下さっているのだから、帰っていらっしゃると思おうではないか。お盆はお盆らしくつとめた上ではじめて意味をたずねるのが許されるのである。帰ってこないなら、ご馳走を造ってお供えはしないというのは、身体にささった毒矢の性質その他がはつきりわかるまでは、毒矢を抜いて治療に取とかかつてはいけないというのと同じことであらう。また極楽からならば一年中いつでもおいでになれる筈というのも、私のさかしらなばかりであらう。一年中食べられる茄子やきゅうりが、もぎたてにお味噌をつけてざっくりといたしゅんのきゅうりの味や、紫の色が染まるような茄子の新鮮な香りをわれわれから奪いつつあるのを忘れてはなるまい。

お盆には亡くなった方々はきつと帰ってこられる。そう心に思つて、一生懸命ご馳走を造つて待つて居られるあなたのうちには、きつと帰つて来られる。



精神生活の再発見

漆 間 昭 彦

(横浜市磯子区在住)

私はある浄土宗の寺院の住職の子として生れ、現在の自分に成長するまで寺院の中で育てられました。三人の兄妹の絶領の甚六という立場にありながら宗教とは正に対極的な位置を占めると思われる自然科学に興味を覚えついに土木技術者の卵として身を立てるにいたった。当世流言業でいえば、若気のいたりから、父親や家庭環境などの他律的な要素を排除して、「主体的な立場で、自主的に」わが道を選んできたつもりである。ところが、学校を卒業して親元離れての天涯孤独の生活二年、マンネリ、虚無感に苛められ何か仕事の外に自分を練磨しなければと思っている所へ、家より少僧都養成講座を受講する気はないかといわれしばし考え込んだ。私は生活面では寺院という宗教的環境で育てられながらいわゆる宗教的実践は何も行なわなかった。親は好き勝手、自由放仕

の元で私を養育し、私自身も宗教に取り立て興味を持たなかった。

しかし二十数歳になった現在私は知らず知らずのうちに父から受け継いだと思われる宗教的な思想が少なからぬ根づいているのではないかと思ひ受講を決心したのである。反面、人生若干数十年同じ一生なら色々な分野、社会を経験するのも意義有るのではという野次馬的要素が皆無とはいえなかった。しかし同じ受講するならこれを契機に私はできる限りの事を行なうて見ようと養成講座を受講終了後も横浜の某寺院へできる限り行く様努力し寺を通しての宗教を学んで見ようと思っている。

そこで、工学部を卒業後、若干養成講座を受講し初めて宗教に触れた私は何もうるわけはないが、現代の一般の常識

人の多くの方が即断しているように、「科学と宗教とは水と油のように全く折り合わぬものだとか、思想的に矛盾対立關係に立たざる得ないものである」といった關係にあるのではないと思ひはじめました。

科学も経済も、政治も文化も、あらゆる社会活動に科学性というところが非常に大切であると考えことは正しい。またそれが常識ともなっている。それは、どれもが本来、個人および社会の人類としての幸福追求の悲願になつた思想と行動であるはずだからである。ところが現実の社会の実態は必ずしもそうはなっていない。現代は、多くの人びとの幸福追求の切実な願いにもかかわらず、人類の幸福とはまさにうらはらの戦争不安、公害不安が日ましに高まつている。これらの不安は、物質主義的・経済主義的な幸福感がゆきついた矛盾が具現化されたものに過ぎない。

幸福観の中に精神面が欠除していることの証拠でもある。ところが、不幸にも、科学技術の驚異的な進歩と経済の急速な拡大をとげつつある現代は、人びとの幸福観の中にこの精神面の重大な価値を見出させることを非常に困難にしているのが現実である。だがそれゆゑにこそ、現代人は、人生観や世界観、さらに物質観にまで、完教的認識をとり入れること

がなによりも大切であることをいまこそ大いに自覚する必要があると思ひます。

われわれ人間は、資本家であれ、労働者であれ、政治家であれ、また教師であれ、学生であれ、自分がいかなる立場にあるかという問題とはかわりなく、あらゆる立場を越えて、もっと神を恐れなければならない。もっと大自然の尊厳さに心を触れさせねばいけないと思う。

地球上で人の力の及ぶ地球は非常に少なくなつたが、それでもわずかの限られた地域に、人に毒されていない原始林や原野がある。そこでは野生の動植物が、それぞれ生きていくためには、たがいに他の生命を奪ひ、奪われながらも、過度の破壊もなく、きわめて美しい自然の調和がみごとに保たれている。その自然の調和が成り立っている仕組みについては、科学はこれを詳細に解き明かすことができるでしょう。

しかし、人の力の影響のおよばぬ自然の中には、そうしたみごとに調和と平和があるという事実の存在、そのことを人は知識として、また論理として追及するのではなく、まずその自然を親しみ、愛し、さらに恐れ、敬ひ、そしてこれを感じなければならぬ。地球上に住みついている人びとの一人でも多くが、自分もまた大自然の中の一箇の生物として、母な

る自然のふところの中には、くみ育てられていて、その中に自分が生きてゐるのではなく、生かされてゐるという本来の姿に気づいて、この心を自らのうちにとり戻すことを願わずにはおれない。

この素朴な心の再発見が、波紋のように世界の全人類に波及することを願わずにはおれない。この願いというのは、人類全体がその精神生活をより深めていくことへの願いであり、祈りである。科学技術がもたらした余りにも豊か過ぎる物質生活、経済発展がもたらした物質生活の内容の余りにも急速な変化が、人びとの精神生活へ向ける心のゆとりを著しく失わせてしまったことへの反省から発する願いである。科学と宗教を、たがいに矛盾するもの、対立するものとしてとらえる考え方に立てば、こうした願いや祈りは、単なる情緒に過ぎないではないか、現実逃避的な精神主義ではないか。それは科学を否定し、物質というものの現実的な実効性に眼を閉ざした、空疎にしてとるに足らぬたわごとである、ということになるであろう。しかし科学的探究の窮極において科学の限界を知るところに宗教との接点を見出し、科学技術を改めて見なおしたらどうであらうか。

人間の生活にとって、物質生活は、もちろん不可欠の重要

な一面であるし、その充実は、人間自身が汗と油で築き上げてきた科学技術の力に期待すべきことはいうまでもない。ただ、どんなに物質生活を充実し、拡大していても、もうひとつ、重要な一面であるところの精神生活に眼をそむけて生きていくことはできない。もしも、あえてそれをしたとすれば、それは人間が野獣に成り下がったことを意味する。物質生活の充実や拡張による外面的な豊かさや華かさに眼を奪われた、今日のような情勢をそのままに放置すれば、物質的に豊かになればなるほど、われわれの心の中では、精神生活の占める比重がどんどん減少していくことは必至である。精神生活の貧しい人間で構成される社会、そこには人間性喪失がある。今後ますます進歩の度を速める科学技術は、さらに豊かな物質生活をわれわれに約束している。その上、社会の経済的エネルギーもますます巨大になっていくだろう。こうして、際限なく深刻の度を深めていく人間性喪失への勢いをくいとめ、さらにこれを引き戻すために、われわれは、まずわが心を研ぎ澄まし、自分自身の精神生活の内容を充実させ、わが生活の中でその比重を高める努力をする必要があると思う。

素朴な原始人の心、大自然を敬愛し、かつ恐れる心、神に

祈る心を自分の心の中に再発見し、これを自分の心に定着させるために、宗教を真剣に見なおすことがなによりも必要なのではなからうか。個人から家庭、地域社会、国家、民族、

はては世界の平和と人類の幸福とは、この心の中にこそあるのであり、またこの心から生れ育つものなのではないでしようか。

読者の便り

渡 辺 杜 水

(愛知県西尾市刈宿在住)

御忌参り

浄土開宗は所伝によれば三月十五日とか、それは丁度、京都の町は花盛りの頃か。しかし、御忌は正月二十五日、それを四月の花にまで延して京都の本山、いづれも賑々しく営まれて、浮世の春と調子を合せている点、あまり調子が良すぎで頂きかねる点もあるが、もう既に慣例になってしまつて、俳句の歳時記などにも「御忌」を四月二十五日と決めている。

本年の御忌、京都見物かねて本山参りの団体バス二台、三河路よりはるばる出かける。善男善女、総勢百余名、花の陽気に旅行気分もあって、納骨の包みも軽々しく膝において打興じるバス風景。途中、まず石山寺に下車して湖畔の勝景をたのしみ、京都入りし

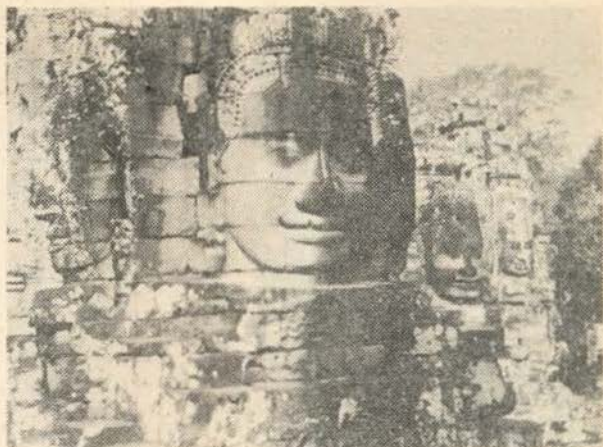
て三条より知恩院に入る。折から御忌の法要の真最中にて、その盛儀に睦目すると共に、山腹にかくれている御廟をひそかに遙拝した私である。

それより平安神宮に詣でて、私たちの本山誓願寺(新京極)へゆく。バスが入らないので御池通りで下車し、寺町通りをぞろぞろと歩く。鴨川通りの提灯を店頭につらねている町を歩いて、本山の御忌大法要に参詣する。

そして納骨をすませばやれやれ、鴨川踊りは目の先だ。さあ行くう。わたしや遠くても都踊りの方がいいから、そちらへ連れていってもらうんだ、とそれぞれ先達を引っ張つての遊行三昧。それも花の都に出て来た田舎者の抵抗ともいうべきか、四月の御忌の是非論も、このあたりが原点になるようだ。

春の夜の町は、さらに美しく、物の豊かさを空にまで反映して、いつまでも床に就くことを忘れさせようとしている。本山での眠りは浅かった。

そして翌日、バスは再び京都巡りをつづけ、宇治、奈良を経て、楽しい帰途についた。



バイヨン廟石塔の彫刻面

バイヨン廟

見渡す限りの樹林の中に切り開かれた広場の南門に最も近い、バイヨン廟の前に立つ。正面は第一回廊というのが、石

カンボジアの旅〈中〉

佐藤 治子

の柱かニョキニョキたっているだけで屋根がない。恐ろしい熱帯樹は自由に這い、あるいは石づたいに上がり、遂にはだんだんと破壊してしまう。第一回廊の屋根もジワジワと壊されたにちがいない。入口の右側であったらうか、美しい姿の踊り子の彫刻がある。丁度外国の会社が映画を撮りに来た時、よく写せるようにみがき出したということである。

そこから左に折れると、内壁は一面の浮きぼりである。働いて疲れた人の肩をもむ女の人に、思わずほほえんでしまう。将棋をさしている男の人や、料理をしている場面など、様々の庶民の生活の一端が次々に浮きぼりになっている。実に細い彫りである。そして面白い画面である。

屋根のない第一回廊を途中から右に折れ、通路から中庭へ足を踏み入れた。そこから上へ登るのに修理中なのであろうか、通路の石板もあぶなっかしい。板をかけてある所もあつ

た。しかも狭い。よそ見などできない。一步々、足許に注意しつつ上へ上へと登る。ようように平らな所へ出た。

ニヨキニヨキと盛りあげられた塔のような石の山。その一つ一つに南門で驚ろかされたと同じ大きな顔が彫られ、ニンマリと笑っているような表情をしている。けれどこちらも笑いたくなるあたたかさをもっている不思議な笑み。「ここへ立ってごらんない。遠く近く三面の大きな顔が一度に見えらるでしよう」。大きな顔々々、東洋的の微笑みであらうか。下を歩く私達は、何と小さく感じたことだろう。その顔をもつ巨大な石のニヨキニヨキと立ち並ぶ間の通路を一回りしていく。仏教の彫られた小さい祠堂。（私の頭は石の間を縫う迷路のようにこんがらかってきた。どこに何があったか分らなくなってくる。）

せまい入口を再び入る。グルグルとぐるをまいたところに仏様が座り、大蛇の頭は仏様を守るように鎌首をもたげた形の彫刻、また小さい祠に四角い石の上にリングが置いてあるところもあった。そこからダラダラ登ると祠のような一間に井戸があった。深い深い井戸。皆のぞいてみる。そこに土地の人であらうか、女の人が子供を連れてしゃごんでいた。

ジャヤヴァルマン七世は仏教を信じた王である。バラモン

のシンボルのリングもまつられてある。願いごとのかなえられるように、ひざまづく人もあるにちがいない。石板も危ない位いたんでいるのに、リングだけは壊されてもいないし、井戸から水をくむこともできるのだ。狭い、ややこしい迷路を通り外へ出たところに、また浮きぼりがあった。ガイドさんは、特にこの説明に力を入れていた。つまり癪病になった王様の「癪王物語」のリリースであったと記憶している。王様に侍女達がかしづいて看病している画面も、その物語の一幕であった。

王宮の周辺

外へ出た私達はバスへ乗る。すぐそこ思っても、王宮前広場は中々広い。王様が立って閼兵をされたであらうテラスの近くでバスを降る。工事中であらうか労働者がいる。登る階段の両脇に象が並んで、その鼻が下にたれている。

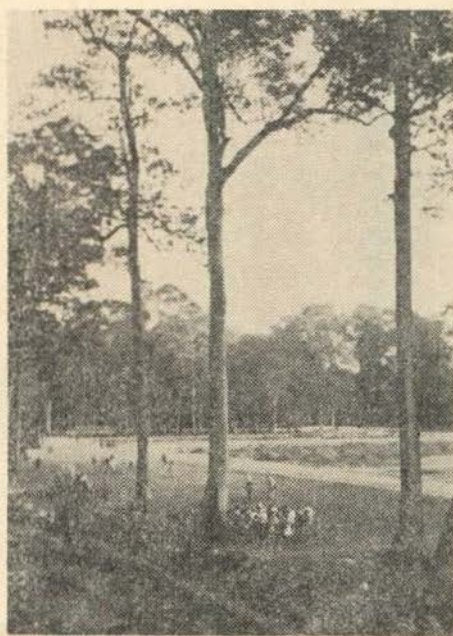
テラスの後方一帯は樹林である。広場の向うに十二の裁判所の跡がある。その後方は無限におい茂る大森林。テラスを降り、木の下径を裏の方へ案内される。奥へ行くと、ピメアナカ寺院がある。あたりは木々を切り開いた跡らしく、ポカシと空へ向って口を開けているように明るい。この神殿は他

のと違い、正面に下から上まで階段が一直線についている。一番若い前田さんは、タッタッと登って行かれてしまった。ナーダ姫がここに住んでいて、毎夜王が通った。来なければ禍いを起すと王を脅迫したとか、私達は森の中で一休みしながら伝説を聞いていた。蟬がいっせいに鳴き出した。誰もいないシーンとした森の中で聞えていた私達の歩く足音が、暫くとまったせいであろうか。

近くにあるプールのそばを通る。女用のプール（浴場）の周囲にある階段が、よく見ると腰かける所が自然にすりへったように造られている。水が少ない時は少ないまま、階段を下へ降りれば水浴ができるようになっていし、そのくほみも一休みの腰かけに具合よいように造られているらしい。きめの細かい設計に、思わず皆ほえんでしまう。腰かけてみると男の人もいる。「ああ蟬時雨」俳句でも作りたくなる静けさである。木の下径を広場の方へ戻る。牛がノソノソ歩いて来た。

森を出ると群像テラスの北端に、小さいテラスがあった。この上に王の像がまつられていた。ブノンベンの博物館に古い本物の像は移されているという。一般観光者にいたずらされるのを恐れたためであろうか。「癩王」といわれ、癩病で

王城の広場附近の樹々



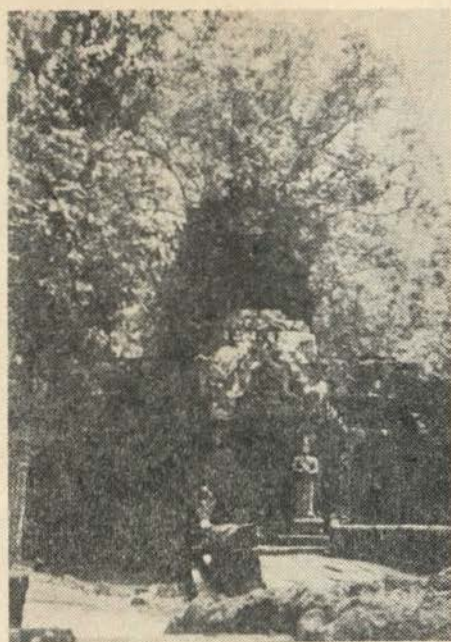
死んだといわれるヤソヴァルマン王の像がこれであるという。

パスの所へ戻ると小さな箱から、何か渡してくれる。おしほりノ箱の中に水を入れ、タオルを入れてあったのだ。冷いことノ日本に留学していたというガイドさんの思いやりであろうか。ありがたいと、皆鈴首をふいたり顔をふいたり

！さて、バスは広場をあとに、勝利の門から王宮の外へ走っていく。

タブロム寺院

工事を途中で中止したというタケオ寺院の前を通り、再び森へ入る。森から出たり入ったりというのは、大樹林の中に



熱帯樹に荒されるタブロム寺院

ある寺院々の周辺は、木々を伐採してあるから、森の中へといっても、結局は大森林の中なのである。昼なお暗い森林地帯を走るバスの左側に、最も古いといわれる橋を窓からのぞいてみる。暫く行ってバスを降る。

高い高い木々の下径を案内者のあとについて歩く。いきついた廟のすばらしさ！すばらしいというのは美しい意味ではない。ここだけは手入れせず荒れるまま、熱帯樹のはびこるままの姿でいるのである。ジャングルに荒らされているタブロム寺院！ジャヤヴァルマン王によって、一一八六年に母を祀るために建てられたものだという。

屋根の上に落ちた落葉の中にあつた種が生え出し、木は上へと伸び、根は水のたれているところを下へ下へとのびていく。石を割り、石だたみの上を欄干のように這い、だんだん太くなり、地面へのたうちながら地中へ入っていく。おとされた大きな石がゴロゴロころがり重っている。「危険」と貼札のしてあるところもある。すごい。「一人で歩かぬよう」とガイドさんが注意する。どこへ行くのやら、ガイドなしでは怪なさま、どこへ迷って入るか分らない。

長い間ジャングル地帯の中に眠っていたというアンコールワットもトムも、こういう姿でいたのであるか！屋根の

上に生茂った木で、すっぽり石造の祠堂の形をかくされたものもある。両手の指をひろげて顔をかくす子供達の手のように、建物の表面をかくして這っている幾条もの木の根。このままでは、このしつこい熱帯樹に、いずれは崩壊されてしまう。石の回りを、あるいは石を踏みこえて、ようやく北の門から木の下径を、明るい道へと出ることができた。

訪れる人の行くたびに姿が変わっていくであろう、このタブルム寺院の強烈な印象は、私の心にいつまでも残るにちがいない。

ブノンペンへ

森林地帯を走り、ホテルへ戻り、昼食をすます。ホテルを一時半出発。遠くもない飛行場へ行ったものの、三時三十分飛行機が発するまで大分時間もある。空港にいるという私連二人に荷物を預け、先生方は拓本でも見て来ようと町の方へ出かけられる。昼寝の時間であらうか、従業員もいない。「人がいないとなると徹底しているわね、大体なまけものかしらね」と、ベンチで腰かけている私達は、古都の空港の留守番みたい。私は日記の整理にかかる。三時近くには、出かけられた先生方も戻って来られたし、飛行機へ乗るらしい人

達もぼつぼつ集まってきた。飛行機も未だ着いていない。のんきといえはのんき、至って漫々デーな空港である。

やがて飛行機が着陸。それに私達は乗り、ブノンペンへと飛び立つたのは五時五分。「お待ちせしました」の一言もない。長いこと待ってようやく乗ったと思ったら、五十分でブノンペン空港へ着いてしまった。時間に正確なことになっている、そしてせっかちな私達日本人も、漫々デーでいいといらいらしてくる。

私達の泊るホテルはL・ローヤルホテル。名前からしてフランス植民地時代の名残りである。道路は仲々広く、走っていても心地よい。ホテルは立派で、部屋も天井が高く、古くさいけれどフランスが管理していた頃を偲ばせるものが、未だに残っている。中庭のプールの向うにある、しゃれたレストラン風の食堂で夕食をとる。

八日。どこからか教会の鐘が聞えてくる。ベットをおり、急いで窓を開けてみる。官庁街のような所なので、広い通りは未だ静かだ。教会は見えない。けれど鐘の音は通りを流れていくかのように鳴っている。

八時朝食。今日は半日を市内見学することになっている。

道

室津への道 高橋良和

法然上人が四国流罪の途中の化導には、いろいろと語り草がある。

兵庫県の高砂の浜では、七十あまりの老人の漁師を化益し、念仏者として、臨終正念往生を遂げたというはなしがあるし、その近くの室津というところでは、珍らしく遊女がその導きをうけている。

この室津というのは、現在兵庫県揖保郡御津町室津といわれるところで、その地に浄運寺という寺が残っている。室津というところを四十八巻伝では、室の泊と称しているが、おそらく瀬戸内海の船泊りであったと思う。

この辺の発達は古く、また寺も用明天皇の時代であるというから、五百八十年代である。

そのころであるから、この浄運寺も日本の僧ではなく、中国から渡来の方道仙人の開創であるといわれている。

その後真言宗を開いた弘法大師が、四国に巡錫の折、この寺に立ち寄り真言宗に改宗している。

それから五百年はすぎた。

法然上人の四国流罪の道すがら、各地において上人は、いろいろな人々を救済しているが、経の島における、高砂における、そしてこの室津においては、遊女を救済している。

法然上人が、四国流罪に出発のときは、承安元年三月十六日（一一七一）であった。この日に京都を出たのであるから、この室津ま

では、十日や、二十日はかかっていると思われる。

そのとき、一艘の小船が上人のもとに近づいてきたのである。

みるとその小船には、一人の女が乗っている。しかも、その女たるや、身なりは卑しく、その風で職業がわかるほどである。

そのとき、この船に乗っていた女から声があった。

この船には法然上人という方がお乗りになつていたのでございましょう。わたしはまことにはしたなきわざをする女でございす。この罪業深き身をなんとか、お救いいただきたくまいりました。

ということであつた。

法然上人はこの女からの訴えを聞かれると、船から身体をのり出して、かの女に声をかけたのである。

あなたの職業は、まことに女性として、横しまな、そして淫行なことをしているらし

いが、もし速やかに出離の道を得たければ、そのわざをやめるより仕方がない。然し、外に生計をたてる道もないように思えるから、そのままよりから、念仏するようになれば、必ずや、弥陀の救いはあると思う。

このことばに遊女は、涙にむせんだのである。

わたしのような卑しい女でも、弥陀の救いはうけられる。

そう思うと、何度も何度も、上人の船をふり返えりながら、室の泊の方にかえつていった。この名もなき女の救いを求める訴えは、上人の心をとらえたらしい。

それから上人は、塩飽（しあく）島に上陸して、讃岐の地に流罪をうけて、いわゆる配流の方となるのであるが、そして、半年ほどすぎたとき、天皇の許しをうけて、再び都にかえることになるが、再び法然上人を乗せた船はこの室の泊についたのである。

かの女は信心堅固であるからきつと、よき往生をとげるであらう。

と、口に出して、その女のその後のことを心配のようであつたところ、この室の泊にいたのを機会に上人はたずねたのである。

いつかのあの女は、その後如何になつたであらう。

これを聞いた室の人は、

お上人さま、ありがとう存じました。かの女は、その後一生懸命に念仏いたしましたして、その後いくらもたないうちに、往生いたしました。その臨終は立派なものでございました。

と、報告したのである。

すると上人は、口もとに笑をたたえながらしつらん、しつらん。

と、いったということである。

そうであつたらう、もっとそうであつたらう。

と、法然上人のやさしい心が、このような

遊女にも及んでいることをあらわす、やさしいことばといえる。

上人はやさしい方であつた。

その遊女は友君といい、この友君の墓のある寺が浄運寺である。瀬戸内海の海に面して自然石の碑が友君の墓であるとなつたえられてゐる。

この寺の本堂には、法然上人に縁りの数々が什宝となつてゐるし、友君の像が本堂に安置されている。

珍らしいのは、法然上人が友君の請を入れて、御自作とつたえる上人の御首に、友君自身が墳土で、御身体をつくつた、いわゆる上人と友君の合作の法然上人像が残されている。

真偽を云々するより、上人の教化が、如何ような人々にも及んでいる一つのしるしでもある。

その外いろいろな伝説も残っているが、それよりもっと正して味わつたのは、さきの、「しつらんしつらんのことばであると思う」。

大樹寺のある岡崎から旧足助街道を北上し。巴川の溪流を左側に見ながら人家をぬって行く。松平町九久平に入っている。そこを右におれ山間部に入っている。松林や雑木林、将又石山となり道路も一段と狭ばまっている。近年自動車の町豊田に合併され、同市の緑地帯として発展を遂げようとしている。右、左のカーブも多く高月院への標識に従いおよそ六キロ、松平町松平、いわゆる松平郷に入っている。まず左手に松平神社、これは松平八代の祖、親氏の屋敷跡といわれている。石垣をめぐらし、その外側に堀を配し、左手に馬場もあったようだ。毎年四月には権現さまのお祭りとして近郷の住民を集めるところでもある。今度は神社を右手に登ると、五、六十米にも及ぶ白い築地が目に入っている。急斜面を登るほどに、清涼な空、山林の青、築地の白、みごとに自然の色彩が感ぜられる。

この高月院は成立は明確でなく、古くは修驗ともいわれているが、普通松平初代親氏（寺伝では応永元年四月二十日寂としているが諸説々々である）の開基といわれている。しかしその親氏も伝説上の人物という領域を

出ない。『三河後風土記』などによると父有親と共に時宗の遊行僧となり、流転のはて辺鄙の地松平に定住し、松平を名のるようになったとしている。しかしその確たる根拠はない。松平町は地理的には農業生産も極めて乏しく、交通は不便で今もなお山奥の寒村という表現が的確である。しかしこうした地理的要素は別として、

親氏—泰親—信光—親忠—長親—信忠—清康—広忠—家康

という松平家の発展過程から正しく親氏、泰親の活躍を把握しなくてはならない。一概に家康が全国制覇をしたからといって、八代前にその可能性は別として必然的なものはなかったはずである。その時の精一杯の活躍を見逃してはならない。そこには歴史を通した運、不運が存在するかも知れない。

また松平家（徳川家）は新田氏の末孫であるといわれてきた。しかも群馬県新田には徳川郷があり、東照宮もある。いうまでもなくその真偽は明確ではないけれど、そうしなければならなかった人間の心情も認めなくてはなるまい。

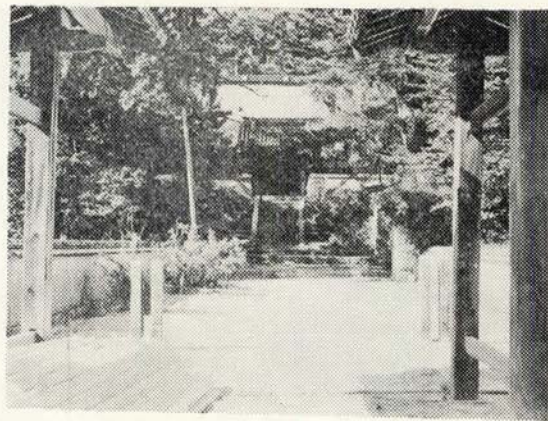
高月院の境内の左手奥の高まった所に石垣をめぐらした墓所がある。大樹寺開基である親忠が整備したといわれる。新氏、泰親、親忠の室の三基の墓が並び立っている。小さい五輪塔であるが風化がはなはだしい。先日遷化された増上寺権尾法主が昨年おとずれられ、供養がてら手でその形を見ておられた。一つ一つ五輪の形を認められ満足そうな顔で称名してみえた姿は忘れることができない。

二代の泰親は松平郷より巴川を下り岩津城を攻め、そして三代信光は岩津を中心に発展し、子女をもとに十四松平の基をなした。親忠は安城（祥）へと進むのである。

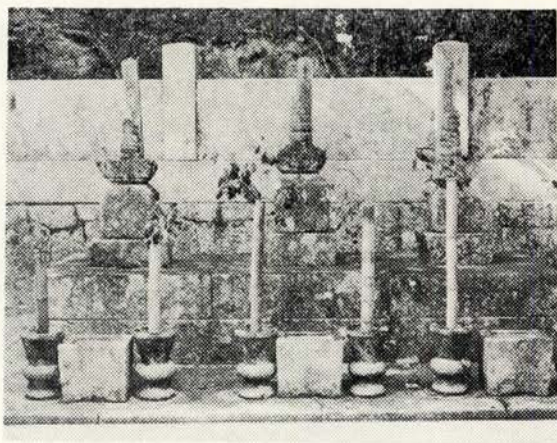
ともかく親氏、泰親の辺鄙の地を基としての活躍は伝説の人物であろうとも、松平郷には今もなお力強く住民に生きている。親氏公、親氏さまと親われそれが高月院への信仰の一つとなっていることは注意しなくてはならない。近年、青年団の研習や婦人会の行事につかわれその面目をはたしている。吉利といわれる寺院の布教の一面を自然の調和に叶った白い築地にみたような気がした。（田中）

浄土宗の古刹をたずねて〈3〉

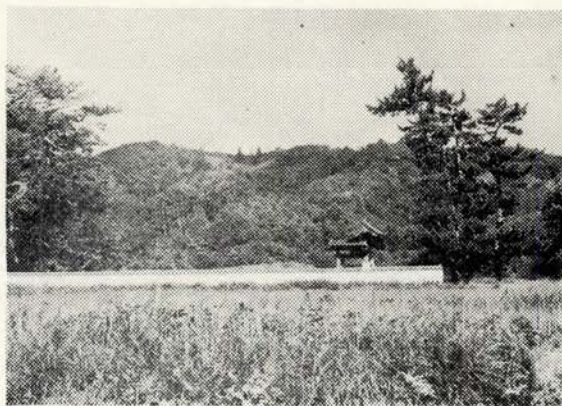
三河高月院



高月院境内



松平初代二氏の墓



参道よりみる

“お盆の施本にご利用下さい”

『お ぼ ん』

おぼんのいわれ・おぼんの用語・法然上人のみ歌
これからの仏教行事・母の詩二題

新書版・表紙共12頁 価15円(100部以上12円)送料実費

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三 碩 学 『浄土宗読本』 覆 刻 版
の 名 著

価 1000 円 ㊦ 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

浄土トラクト

新刊 『浄土宗のおつとめ』 村瀬秀雄著

B 6 判 本文16頁 価 50 円 百部以上 45 円 ㊦ 25 円

各々御用のむきは早目に本会へお申込み下さい。

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄 土 七月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四十六年六月二十五日印刷
昭和四十六年七月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会